

< Essay >

いざ、バルモーラル城へ Going to Balmoral

梅宮 創造

Sozo UMEMIYA

一度この目でバルモーラル城を見たかった。それが叶えられぬままに今日となり、ディケنز・フェロウシップ・コンファレンスがアバディーンで開催されるに及んで、やっと運がめぐってきた。見学地の一つにバルモーラル城が指定してある。ただしこれはプログラム末尾に「お好み遠足」として有志に呼びかけている次第だから、どうしても付録の感が否めない。付録だけに参加するのめんどろかと考えて、二日さかのぼり AGM, すなわち総会から顔を出すことにした。もとより本学会の全貌については知らず、そちらは矢次綾さんのご報告にお任せして、ここではいささか身勝手な感想文なりを綴らせていただきたいと思う。

バルモーラル城はかねてより関心の的であった。何がそれほどまでにといえば、一つはもちろんヴィクトリア女王についての興味であり、もう一つは女王に(また生前のアルバート殿下に)仕えた当地の従者ジョン・ブラウンへの愛着ゆえである。ヴィクトリア女王の、というよりもヴィクトリアという一女性の躍如たる姿は、リットン・ストレイチーの名著『ヴィクトリア女王』からも、あるいは彼女の声そのままの『日記』の各ページからもありありと感得することができる。

なかんずくジョン・ブラウンはヴィクトリア女王にとって掛替えのない男であった。毎年夏から秋にかけて女王一家がバルモーラルに滞在する。ジョンはアルバートの狩りのお供をしたり、山野のピクニックに女王を案内して共に楽しいときを過ごした。

「ここで一休みだ。これ、飲んだらいいや」

「まあ、こんなに美味しいお茶を、わたくし、飲んだのは初めて」

「ん、こいつをちょっぴり入れてやったからよ」

ジョンは飲助だったから、いつもウイスキーの小瓶を腰元にぶらさげていた。

ハイランド人の豪放磊落と、ちっとも飾らないまっ直ぐなその気性に、女王は側近の誰からも得られぬ心の安らぎを感じていたのかもしれない。ジョン・ブラウンはただの従者どころか、傍らにいつも欠かせない、もっとも安心できる、もっとも頼り甲斐のある男であったようだ。譬えるなら、リア王と道化、ミスター・ピクウィックとサム・ウェラー、あるいはドン・キホーテとサンチョ・パンサの組合せではないか。

アルバートが病床に臥して、それを看護する妻ヴィクトリア、労むなしくしてついにアルバートは帰らぬ人となる。この前後の張りつめた空気とヴィクトリアの底知れぬ悲しみは、彼女の『日記』に余すところなく活写されている。その後女王はワイト島のオズボーン邸に引きこもり鬱々たる日々を送ったが、そんなある日のこと、ハイランドの愛すべき従者ジョン・ブラウンがやって来た。アルバート死後に、女王はこのとき初めてほほ笑んだそうだ。人も知る古い映画に『ミセス・ブラウン』という、ちょっと皮肉なタイトルの一作があるが、終始喪服姿にこわい顔をくずさないジュディ・デンチに、まさしく当時のヴィクトリア女王その人が乗り移っているようだ。

バルモラル城には亡きアルバートの魂が生きていたのだろう。女王はそれまでになく城に長く留まるようになり、1年の3分の1までもここを動かず、ロンドン中央の政界を困らせたという話である。そんなバルモラル城をいつか是非とも訪ねてみたかったわけだが、それが今回のコンファレンスにあって実現できたのは有難い。

この地域一帯を特徴づける灰色の石造り、あれは御影石だろうか、バルモラル城もその灰色の石のかがやきを森蔭に映していた。幾つもの小塔がとんがり帽子を空に突きあげ、そのかたわらには円筒形のずっしりとしたタワーが建物全体を統治するかのようそびえている。背後には杉や樅の暗がりにつつまれた小山が迫り、建物の前方にゆったりとひろがる緑の芝地はどこまでも延びて、やがて城の食卓をまかなう菜園へと至る。芝生のむこうにはヴィクトリア女王が折々に愛用したというコテッジがぼつんと見えて、ときに女王さま、広すぎる城内ではかえって落着かぬものやら、ジョン・ブラウンを従えてコテッジの小部屋にくつろぎ新聞を読む、そんな光景を絵に描いたものがある (“The Garden Cottage” by William Simpson, 1882).

城内でいちばん広い部屋という宴会ホールは、今でも王族の公式行事などで使用されるが、所定の期間にかぎり珍品名品を展示して一般に公開している。アカシカは城の一つのシンボルであるが、ホールの壁面の高みに雄鹿の頭が点々とつらなって、そのやさしい目を下方の人間たちにそそいでいる。これは、かのアルバート殿下の趣向であったものか。

宴会ホールから外へ出たとたんに驟雨がきた。小ぎれいな沈床花壇に所せましとばかり咲きほこる花々が雨にぬれ、ほどなくそこへ陽が射したときには、目もあやな夏の色をいっせいによみがえらせた。花壇のへりからは長い石段が下りていて、木立ちのむこうにはディー川の岸辺が待っているとのこと、これもアルバート殿下の設計なのだそう。バルモラル城の諸方にアルバートの魂が息づいている。もちろんアルバート没後にジョン・ブラウンの魂も、この地にいっしょに浮遊していることはいうまでもない。女王が永くバルモラルを愛好したのも納得される。

ところで、ディケンズは最晩年の1870年3月9日に女王謁見を果たした。マイクル・スレイター教授の *Biographical Sketch* (Web) によれば、このときディケンズが女王と話したのは、イギリス社会における階級差だの、階級はいずれ解消されてほしいというような類だったらしい (*Letters of Queen Victoria*, ed. G. E. Buckle, 2nd ser., 1926-8, 2)。女王はこれを聞いて何と思ったことだろう。ディケンズのそのときの風貌や態度に、もしかしたらジョン・ブラウンの朴訥にして正直な、実に男くさい何かを感じ取ったものだろうか。むろん、これは他愛のない空想である。ディケンズはそれからふた月余りのち、5月17日の宮中舞踏会に招かれたが体調不良のために辞退した。